

## 袴の文化と私の夢

お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科  
バズラチャルヤ、ディヌ

2006年3月18日に初めて留学生として日本へ来日し、12年経った現在(2018年3月)博士号を取得することができました。長期間の留学生生活から社会に出て、今後は母国で研究と仕事を頑張っ  
て行きたいと思います。そこで、この場を借りて、日本へ過ごしたこの12年を振り返りながら、  
日本の重要な「袴」の文化と高校生の頃からの私の夢とその実現についての感想を皆さんとシェア  
したいと思います。渥美財団の研究報告会の「誰にでもわかるようにすることが重要である」とい  
うことに留意し、簡単な文章にしています。

私は子どもの頃から学校へ行くのが好きで、就学する年齢ではなくても、姉の代わり、また姉と  
一緒に学校へ行っていました。当時の公立学校では、1人の教員に対して50~65人の児童を1つの  
クラスで一緒に学習させるのが普通であったため、バレルことは無かったのです。勉強に対する私  
の興味に気付いてくれた父は私を基本就学年齢より1年間早く就学させ、無事SLC(10年間の後期  
中学校)を卒業することができました。私は子どもの頃、「いつか私も留学して黒い帽子とガウン  
(修士・博士卒業式のガウン)を着て写真を撮る」と言う夢を持ってました。また、中学生の頃、  
仲間の不登校の理由をずっと気にしていました。高校を卒業後、突然の父の死亡で経済的な問題に  
直面し、留学する夢は叶いそうにありませんでした。働きながら興味のないマネジメント分野の経  
営専攻の学部で学び卒業して、偶然2006年に日本へ留学する機会がありました。また、日本は平和  
で治安の良い国であるため、女性一人で留学することに母からも許可を得ることができました。

その日から日本での生活で多様なハードルと直面しました。その大きな例は、日本語、ひとり暮  
らしすることと食文化でした。12年経った今の自分の位置を見ると、修士及び博士論文を日本語で  
書いたことは自分でも信じ難いです。また、初めて日本へ来たネパール人に日本でひとり暮らしを  
することは一番安全で、楽ですよと多様なアドバイスができるようになりました。ところで、12年  
間経っても日本の名物である寿司は食べられません。また、ゴミの分別もいまだに苦手です。

以上は、日本で経験した忘れない思いです。それ以外に日本へ留学してよかったことは、子ども  
の頃ずっと悩んでいた友人の不登校・中退に関する問題の答えを得ることができ、社会科学の博士  
号を取得できたことです。また、博士専用のガウンと帽子を着用し、写真を撮る夢も叶えました。

ここで、この記事をお読みになっている皆さんは、「なぜ、ネパールの学部の卒業式また、日本  
の修士課程の卒業式でガウンを着なかったのか」という疑問がきっと浮かぶでしょう。ネパールの

場合、卒業式はそれぞれのキャンパス別を実施しません。合格の成績を得てから約半年後、国立大学全体の卒業式を一度に実行します。私は卒業式の時期に日本へ留学していたため、ネパールの大学の卒業式に参加することができませんでした。日本の学部と修士を卒業したときも、亜細亜大学では、袴かスーツが普通でした。袴を着たかったのですが、そのレンタル代が高すぎて最終的にスーツで卒業式に参加しました。

2018年3月で博士課程を卒業することができ、今度こそ博士専用のガウンを着る夢を実現できると思っていましたが、残念ながら、お茶の水女子大学（以下お茶大）の卒業式でも主に袴かスーツを着用するのが一般であることを知りがっかりしました。ガウンを着る夢はもう叶えられないと思いながら、最後の卒業式のいい思いを作るため、いくら高くても袴を着ることにしました。しかし、博士課程の卒業生が袴を穿かないという情報も事務から聞き、さらにがっかりしました。参考のため、お茶大の卒業式担当者から送ってくれた前年度の卒業式の写真見たところ、確かに博士課程を卒業生全員はスーツの姿でした。ところが、写真ではあることに気付きました。それは、ある70代の卒業生がガウンの姿で写ってました。それを担当者に確認したところ、個人で用意できれば、ガウンでも大丈夫と言うことが聞き、本当に嬉しくてしかたなくなりました。早速卒業式の前日までにガウンの予約をし、自分の夢である博士課程専用の黒い帽子とガウンを着用し、卒業式に参加して、たくさん写真を撮りました。また、ある留学生の友人の貴重な情報のきっかけで、国立国際交流会の担当者と出会い非常に安く袴もレンタルすることができました。70代の先輩の写真一枚で、ガウンと袴を両方着用して卒業式を楽しく迎えました。ここでコミュニケーション及び情報の伝達には研究だけでなく、毎日の生活にも非常に重要であることを実感しました。お茶大及び他大学の友人と国立国際交流会の担当者とコミュニケーションを取り、相談をした結果、私の夢が実現しました。私の様に日本へ留学する多くの留学生は、日本の袴の文化も経験したがついていいると思いますが、なかなか手の届きません。国立国際交流会のような情報をもっと広げることができれば、様々な国から来た留学生が日本の重要な袴の文化の経験もできると強く思い、このエッセイのテーマも袴を中心にしました。

以上のように、日本へ留学できたことと渥美国際交流財団のお陰で興味のある分野に研究ができ、中退・中退リスクまた不登校に関する知識を深めることができました。さらに、自分の夢も実現することができました。渥美国際交流財団に心から感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。